

<研究ノート>

茶道にみられる非言語的なポライトネス

—— 献茶の場面からの考察 ——

古 宮 弥 生

東亜大学留学生別科
komiya@toua-u.ac.jp

《要 旨》

Brown&Levinson (1987) はポライトネス普遍理論で、摩擦を防いだり摩擦を最小にしたりする様々なストラテジーとして、5つのストラテジーを提示した。その中に「FTAしない」というストラテジーがある。この「FTAしない」というストラテジーは、言語間での摩擦を行わないように言語行動を控える、いわば「言わない」ことを意味する。しかし、日本語においては言葉にせずにコミュニケーションを図るという場面も見られ、Brown&Levinson (1987) の想定した「言わない」とは異なるストラテジーを持つものも含まれるのではないかと考える。これらの「言わない」という非言語ストラテジーは、もてなしの場面でどのように配慮として用いられるのだろうか。筆者は長年茶道の稽古を重ねた経験から、茶道にはもてなすために様々な配慮行動があると考えた。また、フォーマルな場であればあるほど配慮行動があると推測した。茶道の中でも献茶について調査、考察を行った。献茶とは、神社仏閣で神または仏のために茶道熟達者がお茶を献上することを意味する。本稿は住吉神社献茶式で見られた非言語ストラテジーを調査、分析していった。

その結果、道具についての非言語的ストラテジーと、献茶での動作についての非言語ストラテジーに分けることが出来た。今回、献茶での非言語に焦点をあて分析、考察を行ったが、ネガティブ・ポライトネスストラテジーとポジティブ・ポライトネスストラテジーの双方が見られた。ポライトネス・ストラテジーは、どちらか一方のみではなく、複合的に機能する場合があると示唆される。また、表千家茶道の献茶の場面で言葉にせずにコミュニケーションを図るという場面が見られたため、Brown&Levinson (1987) の想定した「言わない」とは異なるストラテジーが存在すると考える。

《目 次》

1. はじめに
2. ポライトネス
 - 2.1. ポライトネス普遍理論
 - 2.2. 日本でのポライトネス研究
3. 住吉神社献茶式
 - 3.1. 調査方法
 - 3.2. 住吉神社献茶祭
 - 3.3. 献茶式で見られた非言語
4. 分析と考察
 - 4.1. 献茶での道具についての非言語ストラテジー
 - 4.2. 献茶での動作についての非言語ストラテジー
5. まとめ

1. はじめに

人と人がコミュニケーションをとる時、ふと知れぬところで摩擦が起こることがある。誰でもコミュニケーションでの摩擦は防ぎたいものである。Brown&Levinson (1987) はポライトネス普遍理論で、この摩擦を防いだり摩擦を最小にしたりする様々なストラテジーとして、5つのストラテジーを提示した。その中に「FTAしない」というストラテジーがある。この「FTAしない」というストラテジーは、言語間での摩擦を行わないように言語行動を控える、いわば「言わない」ことを意味する。しかし、日本語においては言葉にせずコミュニケーションを図るという場面も見られ、Brown&Levinson (1987) の想定した「言わない」とは異なるストラテジーを持つものも含まれるのではないかと考える。これらの「言わない」という非言語ストラテジーは、もてなしの場面でどのように配慮として用いられるのだろうか。

筆者は長年茶道の稽古を重ねた経験から、茶道にはもてなすために様々な配慮行動があると考えた。また、フォーマルな場であればあるほど配慮行動があると推測した。茶道は日本文化の代表的なひとつであり、礼儀作法の規範を学ぶ場としての役割を担っているため、茶道が日本語を規範とするポライトネスの研究場面として適していると思われる。茶道が日本文化を多く含み、礼儀作法を学ぶ場としての役割があることについて、中川 (2011) は日本人のもてなし方を論じる時、必ずといってよいほど茶道が持ち出されるとした。また熊倉 (2014) は、間瀬兵右衛門という人物が『茶道箸曾呂衛得』に上品な行儀など時代遅れであるけれども、しかし、役に立たない茶道だが、礼儀向上には大いに役立つとあると記している。だが、茶道という場面でのポライトネス研究は数が少ない。また、ポライトネスの観点からの非言語研究も数が少ない。牧原 (2008) はポライトネスの観点からの非言語研究について、配慮表現が日本語においてどのように用いられるかは、言語教育

の場において考慮する必要性が高いと考えられるが、非言語行動については十分な言及がなされていないことが多いとしている。したがって、茶道という場面でポライトネスの観点から非言語ストラテジーを考察することは意義があると考えられる。

本稿は茶道の中でも献茶について調査、考察を行った。献茶とは、神社仏閣で神または仏のために茶道熟達者がお茶を献上することを意味する。明治13年(1880)、北野天満宮において表千家家元碌々斎は献茶を行っている。これを契機に現在でも全国各地の神社仏閣では献茶という神や仏に茶を差し上げるといった催しが行われるようになった。献茶に場面を絞ったのは、フォーマルな場であればあるほど非言語のストラテジーが多く見られるのではないかと考えたためである。本稿の段階的な結果を、日本語教育、日本文化紹介などに活用することを念頭に置き、ポライトネスの観点から献茶の場面での非言語ストラテジーを明らかにすることを目的とする。

次はポライトネスについて述べる。

2. ポライトネス

2.1. ポライトネス普遍理論

Brown&Levinson (1987) のポライトネス普遍理論は、文化や言語の背景に関係なく全ての人がコミュニケーションを取ろうとする際、ある共通する言語行動を明らかにしたものである。このポライトネス普遍理論には、2つのフェイス(欲求)が登場する。この2つのフェイスは全ての人が持ち得ている欲求だとしている。他者に邪魔されたくない、距離が欲しいと思う欲求の「ネガティブ・フェイス」、他者に好まれたい・共感したいという欲求の「ポジティブ・フェイス」である。私たちはこの2つのフェイスを脅かさないために、コミュニケーションの場面で次のようなストラテジーを使用している。①あからさまに言う、②ポジティブ・ポライトネス(褒めたり、共感を示す)、③ネガティブ・ポライトネス(詫びたり、相手との距離を示す)、④ほのめかす、⑤FTAしな

い（言わない）の5つのストラテジーである。

2.2. 日本でのポライトネス研究

では、ポライトネスとは何であろうか。宇佐美（2001）は、ポライトネスとは「敬意」、「改まり」などで訳されることが多いが、円滑な人間関係の確立・維持のために機能した言語行動と定義する必要があるとした。滝浦（2005）も、ポライトネスとは言語のもっぱら対人関係の確立や維持・調節にかかわる働きのことであるとした。なぜなら、Brown&Levinson（1987）が述べたポライトネスには、ポライトネスの和訳とは異なり敬語使用だけを意味するのではなく、共感や親しみも含んでいるためである。そのため、ポライトネスを敬語使用だけで判断するのではなく、敬避的な方面性、共感の方面性の二面的な概念を根底とした、円滑な人間関係の確立・維持のために機能した言語行動と定義することが必要になる。ポライトネスとは、相手の能力や持ち物を褒めたり、敬語使用で相手との距離を取ったりする円滑な人間関係を確立・維持をしようとする言語行動のことである。

このポライトネスの観点から茶道という場面で談話を研究したものに、ツォイ（2014）の研究がある。茶道には、「茶の湯とは、耳に伝えて目に伝え、心に伝え、一筆もなし」という言葉があり、茶道という場面での研究協力を得にくいという特徴がある。そのためツォイ（2014）の研究は、数少ない貴重な茶道という場面でのポライトネス研究である。ツォイ（2014）は、茶席では「形式的な発話」より「形式的な表現をアレンジした発話」及び「雑談」が多く「型を守る」ことを重んじる茶道においても、型にはまらないストラテジー的な言語行動が頻繁に行われていることが明らかになったと述べている。しかし、ツォイ（2014）の研究は言語に特化している。したがって、筆者が茶道という場面での非言語を考察することで、ツォイ（2014）の研究及び、ポライトネス研究に貢献できるのではないかと考えた。

次は、住吉神社献茶式について詳しく述べる。

3. 住吉神社献茶式

3.1. 調査方法

本稿は、2017年11月3日に山口県下関市の住吉神社で行われた献茶祭について調査を行った。調査当日、主催である表千家に所属する長門國一宮住吉本宮献茶奉賛会に調査依頼を行い、調査の意味、用途、保管方法などを説明後、調査許可及び写真の使用許可を得た。同意を得た後、茶会主催者に同意書に署名を依頼した。同意書は主催者と筆者が一枚ずつ同じものを所持し、同意書、写真等のデータは東亜大学留学生別科研究室にて保管している。筆者は進行に一切関わらず、客として献茶祭に参加した。調査は、主催者への口頭インタビューと写真での記録を行った。

3.2 住吉神社献茶祭

住吉神社献茶祭は、1953年に始まり2017年で第64回を迎えた。主催は表千家に所属する長門國一宮住吉本宮献茶奉賛会により行われている。献茶点前は茶道熟達者の男性によって行われた。主催者によると1度も中止にならず今日まで続いているという。献茶祭では、はじめに献茶式がとり行われた。献茶式後の9時半から14時までの間、敷地内に茶席が複数設けられており、客は自分の好む順番で複数の茶席をまわる。茶席は屋外に作られ、自然を五感で感じながらもてなしをうけることが出来る。また、席の構成は各席主（茶席の中心者）によって趣向が凝らされている（写真1, 2）。



写真1 茶席



写真2 茶席



写真3 棚とその他の道具

3.3. 献茶式で見られた非言語

神へ献上する茶と人をもてなす茶では、道具、飾り方、献上の仕方、談話など様々な違いが見られた。違いについては次に詳しく述べる。

○献茶の道具

献茶と人のもてなしでは、表1のような道具の違いが見られた。茶道では、棚というお茶を点てる際の道具を置くものがある。この棚は通常、檜、松、桑、竹などの木材を使って作られる。しかし、献茶ではこの棚に使う木材を檜に限定して作られている。写真3の棚は、神社仏閣を改修工事した際の木材を再利用して作られている。

表1 献茶と人のもてなしでの道具の違い

道具	神事	人へのもてなし
棚	木地（檜）	木地（檜、松、桑、竹など）
棗の塗り	木地	漆
棗の装飾	無し	有り
仕服の色	白色	有色
仕服の装飾	無し	金糸や銀糸、豪華な裂など
天目台の塗り	木地	漆
茶碗の蓋	木地（杉板）	無し

茶道では、棗という茶を入れる道具がある（写真4）。この棗は植物の棗に似ていることから棗と名前が付いた。人へのもてなしの際、この棗に漆塗られ金銀、螺鈿などで装飾がほどこ

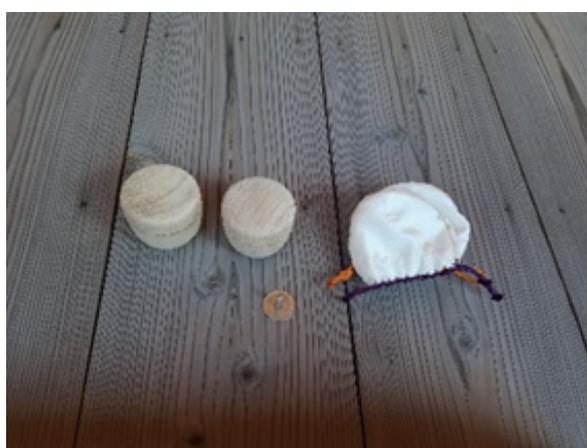


写真4 棗と仕服

されたりする。漆は耐久性、装飾などの理由から使われている。しかし、神事では、漆も装飾も一切なく木目だけの棗であるという特徴があった。この漆の加工がなく木目だけの状態を「木地」と言うが、仏前、または高貴な人に茶を差し上げる際、茶碗の下に台を添えて出す天目台という道具にも同様の仕様が見られた。天目台もまた木地であった。その他に、人のもてなしではお茶を点てた後、茶碗に蓋をすることが無いが、献茶では濃茶、薄茶とも杉板の蓋をして献上をしていた。この杉板もまた木地であった。

棗を覆う布を仕服と言う（写真4）。人へのもてなしの際、仕服は豪華な裂、珍しい裂、由緒ある裂などが使われる。織が繊細なもの、金糸、銀糸が使われたもの、当時では珍しい外来の織物を使用したりした。しかし、神事ではそれら一切の豪華さや由緒などに無縁の白を使う

という特徴があった。仕服にある紐の色は二種類あり、朱が薄茶、紫が濃茶を意味している。

○献茶での動作

献茶と人のもてなしでは、次のような動作が見られた。

表2 献茶と人のもてなしでの動作の違い

点前をする人の動作	神事	人へのもてなし
点前の方法	茶筌飾り	茶筌飾り, 組合點, 仕組點など
会話	無し	有り
マスク	有り	無し
茶碗蓋	有り	無し

茶道の濃茶点前の方法としていくつかの点て方がある。茶筌飾りは、水を入れる水指、茶を入れる器の茶入、茶碗、茶をすくって入れる茶杓のどれかが名物・由緒ある時に、茶を点てる茶筌をあらかじめ水指の上に飾っておく方法である。その他に、組合點、仕組點という方法もある。組合點は、棚や棚前に道具を全て飾り、点前をする人は何も持たずに茶室に入りお茶を点てる点て方である。仕組點は、茶碗と水を捨てる時に使う建水と言う道具を、点前の人が茶室に入る際、同時に持ってくる点て方である。人は点前の方法が数種類あるのに対し献茶では点前の方法が茶筌飾りに限定されていた。

茶道は人へのおもてなしを基本とするため、客と亭主が存在する。客は招かれた挨拶、亭主への労の労い、道具の説明の依頼、感謝、退室の挨拶などを述べる。亭主も客をもてなそうと、挨拶、不手際の詫び、道具の説明、感謝、



写真5 マスク

終わりの挨拶などを述べる。しかし、献茶では点前をする茶道熟達者から言葉が発せられることは一切無く、終始無言でお茶が点てられた。また、談話場面无いだけでなく、お茶を点てる時には専用のマスクが使用され

た。このマスクは通常販売されているマスクと異なり、茶を点てる人が個人で手作りすることとなっていた。写真5のマスクは伊勢神宮で基本とされ使用されているマスクである。顔の大きさ、性差、具合によって個人で改良され、一番いい形で使用されることが好まれる。表千家家元が使用しているマスクは写真5のマスクと異なり、耳かけとなる紙帯を「こより」にし、マスク表面の四方に穴を空け、そこに「こより」を通して使用している。このマスクの表面と、耳かけの紙は「料紙」という紙を用いていた。献茶で使用されるマスクは基本使い捨てであり、複数回使用することが無いという特徴がある。

茶道熟達者によってマスク使用でのお茶が点てられた後、茶碗は天目台という台に乗せられ茶碗には杉板の蓋をした状態で神に献上される。人へのもてなしの際には、茶碗に蓋をするという動作は無いが、献茶の場合には茶碗に蓋をするという動作が見られた。

以上のように献茶と人へのもてなしでは、道具やお茶を点てる人の動作に違いが見られた。次は分析と考察を述べる。

4. 分析と考察

住吉神社献茶式に客として参加し、献茶と人へのもてなしの違いから非言語ストラテジーを調査した。次はポライトネスの観点から非言語ストラテジーを分析、考察する。

4.1 献茶での道具についての非言語ストラテジー

献茶と人へのもてなしの道具の違いは、以下の3点にまとめられる。

- ①漆の塗りの有無
- ②仕服の有色・装飾の有無
- ③茶碗の蓋の有無

①漆の塗りの有無に非言語ストラテジーが見られた。献茶では棚、棗、天目台、茶碗の蓋などの木製の道具は全て漆加工のない木地であることがわかった。人へのもてなしでは、棗、天目台は漆加工や装飾が施されるが、献茶では

木、本来の木目のみを生かした作りとなっていた。また、棚に関しては、人へのもてなしで使われる棚にも木地と漆加工された物の双方があるが、台子という形の棚（写真3）は、献茶では全て檜で作られ、人へのもてなしの時は檜と竹で作られる。人へのもてなしの時に使われる台子は、台を支える4本の柱に竹が使用されることから、献茶の台子と人へのもてなしの時に使用する台子の違いを目で確認することが出来る。

献茶で使用される木製の道具（棗、天目台等）に漆の塗りがなかったことについて茶道熟達者に意見を求めた。献茶が行われるようになった明治初期には今よりも木材が豊富であり気軽に木材が手に入った。そのため、献茶での木製の道具は1回の使用で破棄され、毎年新たに棗や天目台などが準備されていたと推測するという結論に達した。漆を塗るのは装飾の要素だけでなく、耐久性の強化も意味する。しかし、1回だけの使用で破棄するのであれば、漆を塗り耐久性を高める必要も無い。以上のことから、現在では明治初期より木材が気軽に手に入る環境ではないため毎年新たに準備されることは無いが、今までの慣習に則り木製の道具は木地で行われている。

②仕服の有色・装飾の有無にも非言語ストラテジーが見られた。献茶には白色・装飾無し of 道具を使用し、人へのもてなしは有色・装飾有りの道具を使用するということが分かった。

③茶碗の蓋の有無にも非言語ストラテジーが見られた。献茶では茶を差し上げる際に蓋を使用し、人へのもてなしの際は蓋を使用しないということが分かった。天皇などの高貴な人にお茶を点てる場合、天目台という台にお茶を乗せて差し上げるという差し上げ方がある。献茶と人へのもてなしは天目台を使うというところでは共通しているが、高貴な人に差し上げるお茶に蓋をすることは無い。ここでも、献茶と人へのもてなしの違いが見られる。

では、①漆の塗りの有無、②仕服の有色・装飾の有無、③茶碗の蓋の有無に見られた非言語ストラテジーには、どのような意味が含まれているのだろうか。献茶の道具に見られる非言語

ストラテジーから、ネガティブ・ポライトネスストラテジーと、ポジティブ・ポライトネスストラテジーの双方が見られた。

Brown&Levinson (1987) は、ネガティブ・ポライトネスストラテジーには、忌避という慣習的行為が含まれるとした。献茶に見られた道具には、神と人との使用が視覚的の違いによって制限され、使用が慣習化している。このように、献茶にみられる慣習化した道具の視覚的な違いは、使用を制限することで距離を作り敬意を示すことが可能となることから、ネガティブ・フェイスに考慮した非言語ストラテジーだと言える。

また、この道具の視覚的違いは言葉にせずにコミュニケーションを図ることが可能となり、むやみな接触を避けることが出来る。敢えて言語化し、「これは神事だけに使う」や、「触らないで」などを言わずとも視覚的に明確な違いを認識することで、献茶に集った者は使用目的を理解し距離を置こうとする。金田一 (2014) は、国語学者である父、晴彦が講演で日本人は言葉にするのを嫌うという特性があり、この言わない文化が日本人独特であると語ったと述べている。この献茶の道具から「言わない」という言葉にせずにコミュニケーションを図ろうとする日本文化を読み取ることが出来る。Brown&Levinson (1987) は、5つのストラテジーのひとつに「言わない」というストラテジーを挙げているが、言語間の摩擦を防ぐために言語行動を控えるという意味に留まっている。しかし、献茶の道具から言葉にせずにコミュニケーションを図るという場面が見られたことから、Brown&Levinson (1987) の想定した「言わない」とは異なるストラテジーが存在すると考える。

また、一方でポジティブ・ポライトネスストラテジーには、「Hへの興味、賛意、共感を誇張せよ」というものがある。賞賛を誇張する物として人へのもてなしとは異なる道具を用いることなどが挙げられ、「私はあなたを大切に思っている、高く評価している」という表明にあたり、相手への賞賛を誇張するというポジティブ・ポライトネスストラテジーにあたると思

る。その他に、未使用を準備し使用を1回に制限する木の棗や天目台などの道具からも、相手への賞賛を誇張していると捉える事が出来るためポジティブ・ポライトネスストラテジーだと判断する。

したがって、献茶で見られた道具から読み取れる非言語ストラテジーは、神聖なる者に対して敬意を示し距離を作るというネガティブ・フェイスへの配慮だけでなく、人とのもてなしと異なる特別な道具を使う、新品を準備することなどから、相手への賞賛を誇張するというポジティブ・フェイスへの配慮にも用いられていた。また、献茶に集った参加者にフォーマルの度合いや接触の禁止などを道具の違いによって示すなど、言葉にせずコミュニケーションを図るという場面が見られたことから、Brown&Levinson (1987) の想定した「言わない」とは異なるストラテジーが存在すると考えられる。

4.2 献茶での動作についての非言語ストラテジー

献茶と人へのもてなしの動作の違いは、以下の3点にまとめられる。

- ①点前の方法
- ②発話の有無
- ③献上の仕方

①点前の方法から、非言語ストラテジーが見られた。献茶では茶筌ちやせん飾りに限定されていた。これは、様々ある点前の方法で茶筌ちやせん飾りの格が高いからだと推測する。茶道での格とは、フォーマルになればなるほど格が高いと言われる。フォーマルな場面により装いを変えるように、茶道ではフォーマルになれば格の低いとされる手前の方法を用いる。そのため、茶筌ちやせん飾りという点前の方法を取ることで、献茶がフォーマルな場であることを、非言語ストラテジーを用いて示していると言える。

②発話の有無についても非言語ストラテジーが見られた。茶が点てられる間、茶道熟達者から一切の発話はなかった。滝浦 (2005) は、相手との距離を置くことは敬意の表明だとし、明治大正期の法学者穂積陳重のタブー論には次の

ような君主に対するタブーがあると述べている。

- 第一 接触のタブー
- 第二 観視のタブー
- 第三 呼称のタブー

筆者はこの穂積のタブー論から献茶でお茶を点てる茶道熟達者が、一切発話しなかったという事実は、接触のタブーに配慮したためだと考える。滝浦 (2005) は、デュルケームのタブー論にも、接触のタブーとして「言葉」があるとした。デュルケームは言葉を発するという行為について、「発された息が交通を確立する」、「外へと広がっていくわれわれの何ものか」と述べており、言葉を発するということは間接的に相手に接触することなのだとした。したがって、接触のタブーを侵さない配慮行動として、茶道熟達者は一切の発話をしなかったと考えられる。また、マスクの使用に関してデュルケームが述べるように、息や唾さえも接触のタブーに触れることから、それらを防ぐために使用されたと思われる。

③献上の仕方についても非言語ストラテジーが見られた。お茶を差し上げる場所が屋外であることから虫やゴミを防ぐために杉の蓋を使用するといった目的もあるかもしれないが、人が屋外でお茶のもてなしを受ける際、点てたお茶に蓋をされることはない。献茶と人へのもてなしでは、献上の仕方に違いを与えることで非言語的な敬意を示していると考えられる。

以上のことから、献茶で見られた動作についての非言語ストラテジーから、ネガティブ・ポライトネスストラテジーと、ポジティブ・ポライトネスストラテジーの双方が見られた。

まず、はじめにネガティブ・ポライトネスストラテジーについて述べる。献茶の間、茶道熟達者が一切の発話をしないこと、マスクを着用し唾だけでなく息の接触を防ぐことは、Brown&Levinson (1987) の「FTAしない(言わない)」に相当するが、献茶でこの無言が慣習化されているためネガティブ・ポライトネスストラテジーにも当てはまる。また、点前の

方法が異なることから、これらは神に対し敬意を示し距離を作るといったネガティブ・フェイスに考慮した非言語ストラテジーだと考えられる。会話の有無、点前の仕方などの一連の行動は献茶に集った全ての参加者に、献茶がフォーマルな場であること、神との距離を保つことを、非言語ストラテジーを用いて示している。

その一方で、ポジティブ・ポライトネスストラテジーも見られた。献茶で人のもてなしと神事が異なり、発話が一切ないということは、茶道熟達者が「相手を高く評価している」という相手への賞賛の誇張と言えるため、ポジティブ・ポライトネスストラテジーだとも考えられる。

また、ポジティブ・ポライトネスストラテジーには「SとHは協力者であることを伝えよ」というものがあり、話し手と聞き手が関連する行為に協力的に関わっているということを伝えるという配慮行動がある。今回の献茶でも献茶に集った全ての参加者が献茶中に一切発話をしなかったことから、献茶に集った客が献茶という行為に協力していることを示すために、発話が無かったと考える。つまり、非言語ストラテジーを用いることで、献茶に集った全ての参加者が献茶成功への協力者であることを示しており、ポジティブ・ポライトネスストラテジーだと言える。この献茶に集った参加者の行動から、言葉にせずにコミュニケーションを図ろうとする日本文化を読み取ることが出来る。Brown&Levinson (1987) は、5つのストラテジーのひとつに「言わない」というストラテジーを挙げているが、言語間の摩擦を防ぐために言語行動を控えるという意味に留まっている。しかし、献茶での動作についての非言語ストラテジーに、言葉にせずにコミュニケーションを図るといった場面が見られたことから、Brown&Levinson (1987) の想定した「言わない」とは異なるストラテジーが存在すると考える。

したがって、献茶での動作についての非言語ストラテジーは、神聖なる者に対して敬意を示し距離を作るといったネガティブ・フェイスへの配慮だけでなく、茶道熟達者が相手への賞賛を誇張したり、献茶に集った参加者が献茶成功へ

の協力者であることを示したりするためのポジティブ・フェイスへの配慮にも用いられていた。また、献茶に集った参加者の発話の有無から言葉にせずにコミュニケーションを図るといった場面が見られたことから、Brown&Levinson (1987) の想定した「言わない」とは異なるストラテジーが存在すると考える。

5. まとめ

本稿は住吉神社献茶式で見られた非言語ストラテジーを調査、分析していった。その結果、道具についての非言語的ストラテジーと、献茶での動作についての非言語ストラテジーに分けることが出来た。

献茶で見られた道具から読み取れる非言語ストラテジーは、神聖なる者に対して敬意を示し距離を作るといったネガティブ・フェイスへの配慮だけでなく、人のもてなしと異なる道具を使うことで、相手への賞賛を誇張するというポジティブ・フェイスへの配慮にも用いられていた。また、献茶に集った参加者にフォーマルの度合いや接触の禁止などを道具の違いによって示すなど、言葉にせずにコミュニケーションを図るといった場面が見られたことから、Brown&Levinson (1987) の想定した「言わない」とは異なるストラテジーが存在すると考える。

献茶での動作についての非言語ストラテジーは、神聖なる者に対して敬意を示し距離を作るといったネガティブ・フェイスへの配慮だけでなく、茶道熟達者が相手への賞賛を誇張したり、献茶に集った参加者が献茶成功への協力者であることを示したりするためのポジティブ・フェイスへの配慮にも用いられていた。このように、献茶に集った参加者の発話の有無から言葉にせずにコミュニケーションを図るといった場面が見られたことから、Brown&Levinson (1987) の想定した「言わない」とは異なるストラテジーが存在すると考える。

今回、献茶での非言語に焦点をあて分析、考察を行ったが、ネガティブ・ポライトネスストラテジーとポジティブ・ポライトネスストラテ

ジーの双方が見られた。このように、ポライトネス・ストラテジーは、どちらか一方のみではなく、複合的に機能する場合があると示唆される。フォーマルな場であればあるほど、この非言語ストラテジーは多く使用されるものと考えられる。それは、茶道だけに留まらず日本社会の中でフォーマルな場であれば、日本語の特徴である「言わない」という非言語ストラテジーが、敬意、距離、慣習、相手への賞賛の誇張、協力者であることを示す配慮行動として使用されるためだと推測される。摩擦なく円滑に日本社会でコミュニケーションを取るためには、非言語ストラテジーのような言葉にせずコミュニケーションを行うということに着目する必要があると感じる。Brown&Levinson (1987) の想定した「言わない」とは異なるストラテジーには、日本語がしばしば「空気を読む」と言われる由縁が存在している。

本稿はこのたび長門國一宮住吉本宮献茶奉賛

会の調査協力を得て、調査、分析を行うことが出来た。調査協力を承諾して下さった会の皆様にここで感謝を述べたい。本稿の一つ目の課題として、住吉神社献茶式を調査、分析したものに留まっていることが挙げられる。そのため更なる調査、分析が必要である。筆者は二ヶ所の山口県内で行われる献茶式主催者へ調査依頼を行った。しかし、主催者側からフォーマルな場のため調査許可がおりなかった。献茶という場面での調査協力を得ることも二つ目の課題として挙げられる。

本稿は、日本文化を背景に持つ茶道でよりフォーマルな献茶での、非言語ストラテジーをポライトネスの観点から述べた。更なる深い研究が必要であるが、この研究をより深めることで、会議やパーティーなどフォーマルな場面での非言語ストラテジーを使った日本語の会話指導や、非言語ストラテジーに注目した日本文化紹介などに活用していきたいと考えている。

〈参考文献〉

- ・ Brown, P. & Levinson, S. (1987) *Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge University Press. [本書出版後、邦訳が刊行された：ペネロピ・ブラン&スティーヴン・C・レヴィンソン (2011) 田中典子監訳、齊藤早智子・津留崎毅・鶴田庸子・日野壽憲・山下早代子訳] (2011) 『ポライトネス 言語使用における、ある普遍現象』 研究社
- ・ 宇佐美まゆみ (2001) 「談話のポライトネス—ポライトネスの談話理論構想—」『談話のポライトネス』：9-58
- ・ 表千家監修 (2008) 『茶の湯 ころろと美』 不審菴文庫
- ・ 金田一秀穂 (2014) 『金田一家、日本語百年のひみつ』 朝日新聞出版社
- ・ 滝浦真人 (2005) 『日本の敬語論—ポライトネス理論からの再検討—』 大修館書店
- ・ 滝浦真人 (2008) 『ポライトネス入門』 研究社
- ・ 熊倉功夫 (2014) 『文化としてのマナー』 岩波書店
- ・ 財団法人 不審菴 (2002) 『表千家 Japanese Tea Culture The Omotesenke Tradition』 不審菴文庫
- ・ 千宗左 (1957) 『習い事十三箇條』 河原書店
- ・ ツォイ・エカテリーナ (2014) 「現代の茶席の会話におけるポライトネス研究—ディスコース・ポライトネス理論により形式的・非形式的言語行動の分析—」『日本語・日本語研究』第4号：17-37
- ・ 中川伸子 (2011) 「ホスピタリティの起源」『神戸女子短期大学論攷』56巻：25-32
- ・ 久田宗也 (1986) 『茶の湯案内シリーズ⑫ 茶の湯用語集』 凸版印刷株式会社
- ・ 牧原功 (2008) 「不満表明・改善要求における配慮行動」『群馬大学留学生センター論集』7号：51-60